The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本近代朝鮮語教育史の視点から見た島井浩と朝鮮語：対馬から釜山の日本人社会に渡り一生を送った人
Author(s)	植田，晃次
Citation	言語文化研究. 2023, 49, p. 5-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90943
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本近代朝鮮語教育史の視点から見た島井浩と朝鮮語

―対馬から釜山の日本人社会に渡り一生を送った人―[1)]

植　田　晃　次

일본 근대 한국어 교육사의 시점에서 본 시마이 히로시와 한국어

― 쓰시마에서 부산의 일본인 사회에 건너가 평생을 보낸 이 ―

우에다 고오지

논문초록 : 본 논문은 “實用韓語學” 등 한국어와 일본어 학습서　6 권의 저자로 알려지는 시마이 히로시(島井浩)에 관한 연구이다. 먼저 이제까지 알려지지 않았던 경력을 밝히고 그가 쓰시마(對馬)에서 부산의 일본인 사회에 건너가 평생을 보낸 인물이었음을 지적하였다. 그리고 그가 집필한 학습서의 서지를 원본에 기초하여 실증적으로 정리한 후, 상업출판물이라는 성격에 주목하여 이들 학습서를 재해석함으로써 일본 근대 한국어 교육사의 시점에서 시마이를 어떠한 인물로 자리잡게 할 것인가를 재검토하였다.

キーワード：島井浩，実用韓語学，朝鮮語教育史

1．はじめに

「旧朝鮮語学」[2)]の典型的人物のひとりである島井浩は，近代日本の朝鮮語教育史において20世紀初頭，殊に彼がその67年の生涯の一時期に著した学習書である『実用韓語学』（1902/ 明治35年初版）等の著者として，従来知られている。

本論文では，これまであまり注目されてこなかった島井の遺著『朝鮮語通訳と時勢』（島井1935）[3)]の記述を手掛かりに，その他の資料により経歴を補いつつ，島井と朝鮮語との関わりについて，日本近代朝鮮語教育史の視点から，原物主義・人物史主義[4)]に立脚して実証的に明らかにする。原物主義とは，資料に関して，影印本やデジタル化されたものを最終的な判断に用

1）本論文では，朝鮮語文献名には「＊」を付して拙訳による日本語訳で示し，デジタル化資料には「D」を付す。また，原則として旧字体の漢字は新字体で表し，ルビも省略した。

2）矢野（2012）が提唱した概念であり，わずかな専門家が担い朝鮮語の性質を究明しようとする「朝鮮語研究」とは明確に区別される「朝鮮語の運用を目的とする朝鮮語学」を指す。

3）本書については，石川遼子の記述（植田2007: 110）によって示されたことがある。他には，田阪（2010）が本書の記述に触れている。本論文では，管見の限りで唯一確認できた国立中央図書館蔵書（朝47–A8）D を用いた。

4）植田（2012: 204）参照。

いることは極力避け，可能な限り原物を実見した資料に基づいて研究を行う方法である[5)]。人物史主義とは，朝鮮・朝鮮語と関わらない時期を含めたその人物の生涯を通して，時代の中にその人物や著作を位置づけて考察する方法である。

主な先行研究について述べる。まず，島井を直接知る立場から同氏について比較的詳細に言及した大曲（1935, 1936）がある[6)]。次に，桜井（1979）は書誌学の立場から島井の経歴と6冊の学習書のうち3冊を取りあげて略述している[7)]。また，近年では，李康民（2007）・成玧姸（2008, 2014b, 2015）・齊藤（2015a, 2015b, 2017）等が島井の著した学習書の概略を紹介し，内容や構成，朝鮮語／日本語資料としての性格等をめぐって論じている。この他，成玧姸（SUN YUNA）（2009, 2014a）・李康民（2015）・尹栄珉（2015）・黄雲（2021）等の中でも，島井の学習書を取りあげている。植田（2007）[8)]でも「その他の教育機関（戦前）」で朝鮮語を学んだ人物として島井を挙げている。なお，学習書の解題として，河東鎬（1985）・金敏洙（1985; 2008[2]）・李康民（2019, 2020, 2021a, 2021b）・李吉鎔（2020）がある。これらの研究のほとんどは原物に依らないものである[9)]。

桜井（1979: 506）は島井の経歴について，次のように述べている[10)]。

「著者は対馬旧厳原の藩士、明治十六年以来釜山に居住し、明治二十一年釜山朝鮮語学所[11)]に学び、のち共立釜山商業学校、釜山第一公立小学校等の教員を歴任した。別著「日韓韓日新会話」明治三十八年（第1012参照）がある。昭和十年三月二日、歿。」

その後の研究においても，島井の経歴については，概ね桜井と大曲の記述等を踏襲するに止まり，主に島井が朝鮮語と関わった時期にだけ目を向けている。

島井に対する評価も，6冊の朝鮮語／日本語学習書の編纂にのみ注目した「朝鮮語（および日本語）の普及者」・「両国の架け橋」・「韓国語専門家」[12)]といったものである。

5）(1)ウェブ上のOPAC等のデータのみでは正確な書誌は知りえない，(2)デジタル化資料では表紙の色調や薄紙の有無，不明点の確認が困難である，(2)影印本（とりわけ写真版ではないもの）では，底本の不明記・隠蔽に加え，資料の改変・改竄といった危険性等やそれに起因する問題があること等，ウェブ検索，デジタル化資料・影印本の使用は両刃の剣たり得る。これらの危険性や問題は，植田（2010: 26 註4, 2012: 209–210, 2019: 21 註32, 2022: 5 註10）等参照。

6）小倉（1936）でも『再刊交隣須知』（浦瀬本）の印刷について大曲（1935）を引用して島井に言及している。

7）桜井（1974a, 1974b）で取り上げた『実用韓語学』・『朝鮮語五十日間独修』に『日韓韓日新会話』を加えている。

8）執筆は山田寛人（20頁）。

9）李康民（2007: 82）をはじめとする論考で，存在が確認される『実用韓語学』の版次を一様に7版までとしているのは，国立国会図書館に訂正増補第7版が所蔵され（，近年はインターネット公開もされ）ていることと無関係ではないと思われる。本論文の筆者の原物主義による調査によれば，訂正増補第8版が早稲田大学中央図書館・東京大学総合図書館に所蔵されている。なお，東京大学のOPACで当該資料は「訂正増補第7版」とされており，データ上では8版であることはわからない（2022年9月27日最終接続）。

10）桜井（1974a: 120, 1974b: 111–112, 1979: 515・529）でも重複する記述がある。

11）草梁語学所は1880（明治13）年に東京外国語学校の朝鮮語学科開設に伴い学生が移され廃止されている。ただし，島井（1935: 66）は「釜山の語学所は全然撤廃されたが何うか不明である。或は学生の籍だけ外国語学校に置いて矢張り釜山で修業したのではないかと思はれる。」とも述べている。本論文の筆者のこれまでの検討による限り，書誌学者である桜井の記述には基本的に何らかの典拠・根拠がある。ここでいう「朝鮮語学所」が大曲（1935）等を典拠とした「朝鮮語学所」とすれば，固有の名称ではなく「朝鮮語教育機関」程度の意味と考えられることに注意を要する。

12）「多くの朝鮮語会話書や朝鮮人のための日本語会話書を出版しており，金水若水とともに，明治後期における代表的な朝鮮語の普及者」（成玧姸 2008: 39），「明治後期における代表的な朝鮮語および日本語の普及者として両国の架け橋の役割を果たした島井浩」（成玧姸 2014b: 65），「対馬出身の韓国語専門家として知られている」（李康民 2020: 19, 2021a;

このような先行研究をふまえ，本論文は人物史主義による島井自身の生涯にわたる経歴，原物主義による異本を含めた学習書の実証的な書誌に基づく資料に依拠するとともに，対馬と釜山の地理的・社会的・歴史的関係，および学習書が持つ商業出版物・実用書という性格[13]にも着目し，先行研究とは異なる視点から島井と朝鮮語との関係を明らかにし，島井についての評価を再検討することを目的とする。

2．島井浩の人物史[14]

本章では，島井の経歴について，主に島井（1935）と大曲（1936）に基づき述べる[15]。島井（1935）は前述のように島井の遺著で，上代から当時に至る日本人の朝鮮語学習について，体験や現在では散逸したと見られるものを含む資料により詳細に記述したものである。

1867（慶応3）年11月，対馬厳原町大字宮谷[16]に生まれた島井は，1883（明治16）年[17]，15か16歳にして釜山に渡航する。1885（明治18）年9月，修齋学校教員となるも1887（明治20）年1月，同校を辞職する。1888（明治21）年に修齋学校が釜山共立学校[18]と改められ，同校校舎を借りて同年に置かれた夜学の附属英語簡易科・韓語速成科のうち後者を卒業したとされるものの，正確な在学期間は不明である。韓語速成科では国分哲が毎夜3時間ずつ3年間の課程で朝鮮語を教え，上級生には領事館から『交隣須知』や『隣語大方』を配与して朝鮮語の学習を甚だ奨励したという。この配与された「『在朝鮮釜山港領事館』の印章を押捺したる両書」を所持していた[19]ということから，少なくともこれらを用いて朝鮮語を学んだと見られる。1883（明治16）年に浦瀬裕校訂増補で『交隣須知』が再刊された際には，印刷現場を訪れ印刷中のものを見て，「諺文の活字」を直接手にとったと島井は大曲に語っている[20]。なお，『実地応用朝鮮語独学書』

19, 2021b: 19）等と評価されている。

13）商業出版物としての朝鮮語学習書という視点については，植田（2014, 2017, 2018, 2019）等参照。

14）紙幅の制限により，本論文では年譜を収録できなかった。

15）他の資料に依って補った事柄は注記する。なお，河東鎬（1985）は『実用韓語学』の「注意」（凡例に相当）の著述の趣旨に「尚鉄道用語ヲ初メトシ貿易品其他日常必用ノ単語ヲ分類シテ」とあることが「貿易人に韓語実得を願ってのことのようで」あることを根拠に「著者も貿易人のようである。」と解題している。また，金敏洙（1985; 2008[2]）は「（前略）内容・会話に商売，語彙に貿易品等があり，九州博多出身の島井宗室（1539～1615）が貿易によって豪商になった点から見て，その末裔の商人であるだろうと推測してみるのみである。」と解題している。これらはいずれも推測以上の根拠は示されておらず信憑性を欠く。なお，前者ではなぜか「日常必用ノ単語」が「日帝單語」と朝鮮語訳（表記は漢字）されている。

16）『実用韓語学』等の奥付には「長崎県下県郡厳原宮谷町百四番戸士族」とある。

17）「釜山の今昔　朝鮮語の本　島井浩氏懐旧談」『釜山日報』1939年3月12日付(7)Dでは明治15年とされている。

18）島井（1935: 86）では共立小学校，大曲（1935: 156）では釜山港共立小学校としているが，川島（1934: 208コマ）・稲葉（2005: 98–99）によれば，校名は釜山共立学校である（以下同様）。なお，同じく川島と稲葉によれば，この改組は東本願寺別院にあった女児学校との合併によるものという。

19）前掲「釜山の今昔」

20）大曲（1935: 33–34）。印刷現場とは，島井が大曲に語った当時の釜山貯金管理所のところにあった古い建物という。同様の回顧談は前掲「釜山の今昔」にも採録されている。

（1896年）を著した弓場重栄・内藤健もまた同科の卒業生といわれる[21]。

1889（明治22）年6月10日付で釜山共立学校教員となり，職名は訓導であった[22]。1901（明治34）年10月に辞職するまで12年余を同校の教員として暮らしていたことになる[23]。この間，1893（明治26）年2月には夜学校英語科教員嘱托（ママ），1896（明治29）年11月[24]には公立夜学校朝鮮語教員嘱托（ママ）となるも，1900（明治33）年9月に公立夜学校を辞職している。同校では，「［植田註：前身の商業夜学校とは］学生の性質は一変して官吏、警官、教員、会社員、仲使、店員等」に，『日韓通話』を用いて川上立一郎・国分哲・大石明・朴教学・沈能益・辺時中等と教授にあたったという[25]。

1901（明治34）年5月に韓語・韓文学[26]の教授を目的とする在釜山韓語夜学会が釜山公立小学校の校舎の一部を借り受ける形で開設され，島井も一時朝鮮語教員として教鞭を執っていたというが，同会は暫くして経営難により廃止された。

1901（明治34）年10月に釜山公立小学校を辞職した後，一転して志岐組釜山支店通訳兼書記となる。同組は福岡県生まれの志岐信太郎によって起こされた土木建築請負業者であり，釜山に事務所，京城に煉化製造所を設け，「京仁、京釜鉄道其他に供給して莫大の利潤を收め、其他農業に牧畜に永久的経営を施し、台湾に北海道に到る所同様の施設をなして各地に信頼を博し」ていたという，当時の新進有望土木会社である[27]。

島井自身は「明治廿二年から卅二年迄満十一ヶ年間初等学校の教員をし其後は種々の仕事に携はりました。」と述べている[28]。しかしながら，早くも翌1902（明治35）年4月には同組を辞職しているものの，「種々の仕事」については明らかでない。

志岐組を辞職した1902（明治35）年以降，確認できた限りでは，次章で詳述するように，朝鮮語や日本語の学習書6冊を続々と刊行している。なお，成玧姸（2014b: 67）は，『実用韓語学』・『韓語五十日間独修』・『朝鮮語五十日間独修』[29]を「もっぱら日本人のための朝鮮語会話書」，『日語会話』を「もっぱら朝鮮人のための日本語会話書」，『実用日韓会話独学 全』・『日韓韓日新会話』[30]を「日韓両国の人のための会話書」と分類している[31]。

21）弓場・内藤については，植田（2021, 2022）参照。

22）就職日・職名は釜山府・釜山教育会（1927）所収の「釜山第一公立尋常小学校旧職員表」（3頁）による。なお，修齋学校や釜山共立学校での担当科目は不明である。

23）前掲「釜山第一公立尋常小学校旧職員表」では9月退職としている。また，島井（1935: 86）では「共立小学校辞職」とされているが，稲葉（2005: 98–99）によれば，1895年に校名を改めており，辞職当時の校名は釜山公立小学校である。

24）島井（1935）と異なり，大曲（1936: 157）では「明治二十年十一月」とあるが誤りと思われる。

25）島井（1935: 82）

26）大曲（1936: 157）の表現であるが，「韓文学」がどのようなものを指すのかは不明である。

27）中田（1905: 43–44）

28）前掲「釜山の今昔」。島井（1935: 86）では，上述のように辞職年は1901（明治34）年とされており，2年ずれがある。

29）島井（1935）では「韓語五十日間独習」。

30）島井（1935）では「日韓、韓日新会話」。

31）この分類はひとまず妥当であろうが，ある学習書が日本語母語話者の朝鮮語学習と，朝鮮語母語話者の日本語学習に同じレベルで有効な機能を果たしたかは検討の余地がある。なお，齊藤（2015c: 171, 2017: 20）もほぼ同様の分類をして

さらに1926（大正15）年と1928（昭和3）年の釜山商業会議所の会員名簿には，西町2丁目の島井浩という人物が「貸金業」・「金融貸付業」として記載されており，少なくとも1920年代後半には金融業を営んでいたことがわかる[32]。また，ウェブ情報ではあるが，西町の丁目・番地を示しつつ「島井浩（金融）2-15」・「島井浩（貸家）2-36」という記述が見られ[33]，貸家業も行っていたようである。前出の「種々の仕事」（の一部）は金融業や貸家業であったと見て差障りない。

1934（昭和9）年秋，『朝鮮語通訳と時勢』の執筆を始めるも年が明けると病臥し，1935（昭和10）年3月2日，釜山西町2丁目36番地で亡くなった（写真1[34]）。享年67歳，半世紀余に渡り生涯のほとんどを釜山で生きたと思われる。法名は眞徳院釈浩證居士である。遺著となった『朝鮮語通訳と時勢』は，四十九日に際し，同年4月20日付で島井の相続人である次男・俊雄により発行された。

なお，姓名の読みは根拠が見つかっていないが，他の読みより蓋然性が高いと思われる「しまい・ひろし」とひとまず判断した[35]。写真は発見できていない。

写真1　島井終焉の地

3．島井浩の学習書

本章では，島井の学習書の書誌（発行・所蔵状況）について，本論文の筆者が原物を手にとって確認し得たものをまず基本としつつデジタル化資料等により不足を補い，明らかになった結果を示す。その他，補足すべき事項についても付記する。

なお，註9の通り，CiNiiを含め図書館のOPAC等のデータでは，版次の違いが重視されなかったり，すでに書誌がとられているものについては異なる版次のものであっても流用入力さ

いる。

32）釜山商業会議所（1926: 32, 1928: 111）

33）ウェブサイト「釜山でお昼を」（http://nekonote.jp/korea/old/fukei/naka/shinchn/index.html）の釜山の街角今昔＞西町（新昌洞）（2022年9月27日最終接続）

34）写真1は島井終焉の地と推定される場所（信昌洞2街36・光復路39番キル37）の現在（2014年12月24日，植田撮影）。정문인쇄사という印刷会社等が入る4階建てのビルが建っている。また，ここでは詳細は控えるが，登記簿によれば，少なくともこの西町2丁目36番地の他，西町1丁目24番地-1にも島井の名が見られる。一方，2丁目15番地や『実用韓語学』・『実用日韓会話独学』・『日語会話』の奥付にある島井の名に示された住所の西町2丁目24番地については確認できなかった（以上，2014年12月24・26日に調査）。2丁目24番地が上述の1丁目24番地と単に別の丁目の同じ番地の土地なのか否かは不明である。なお，登記簿による調査法は前掲ウェブサイト「釜山でお昼を」を参考にした。

35）大阪府立中央図書館OPACのように「シマイ，コウ」とする場合もあるが，根拠は不明である（2022年9月30日最終接続）。

れるケースが見られる。そのため，最終的な判断に用いる資料は可能な限り原物主義に依る必要がある[36]。上述のような種々の限界を前提として，デジタル化資料を使用せざるを得ない場合であっても，少なくともOPAC等のデータではなく資料「そのもの」[37]の記述により書誌を確認しなければならないと本論文の筆者は考える。

(1) 『実用韓語学』

李冕稙・陳熙星・趙熙舜　閔。確認できた本書の異本の書誌は表1の通りである[38]。

表1 『実用韓語学』の書誌

発行日	版次	所蔵（資料番号等）[39]
1902/M35年5月30日	初版	釜山広域市立市民（711.2/1/）[40]，国立国会（88-291）D
1903/M36年9月15日	訂正再版	香川大学［神原文庫］(2111057322)
1904/M37年4月5日	第3版	大阪府立中央（1511217125），富山市立［山田孝雄文庫］(106789621)，成田山仏教（021-1549）
1904/M37年5月1日	第4版	島根県立（912121021），山口県立山口（002726594）
1905/M38年3月20日	第5版	大阪大学（16200342489），東京経済大学［桜井文庫］(0607) D
--------	第6版	未発見
1906/M39年1月21日[41]	訂正増補第7版	国立国会（特27-833）D
1908/M41年8月10日	訂正増補第8版[42]	早稲田大学（510180045064），東京大学[43]（0002188027）

発行所・印刷所・定価はすべて東京の誠之堂書店[44]，東京の株式会社東京築地活版製造所，定価は50銭である。

訂正増補版では210頁の後に42頁の増補が付された。冒頭に「本書ハ明治三十四年暑中休暇短日月間ノ稿ニシテ特ニ編者ノ無識ナル粗漏多キハ編者自身モ能ク知ル所ナルニ関セズ已ニ第六版ヲ重ヌルノ幸栄ヲ得タリ因テ更ニ一閲ヲ加ヘ貨幣度量衡ニ関スル称呼其他二三ノ増補ヲ加フル事トセリ／明治三十八年七月二十六日」と記されている[45]。ここからは本書の執筆時期も明

36）原物主義に対する批判に対しては植田（2019: 21 註30, 2021: 3 註2, 2022: 5 註10）他参照。

37）註5で述べた通り，「そのもの」は少なくとも影印より写真版が望ましい。

38）デジタル化資料も参考として挙げる。なお，歴代韓国文法大系（第1版・第2版），近世および近代日本の韓国語学習資料叢書の影印は原物主義の立場から含めない（以下同様）。

39）館名の「図書館」を略す場合がある（以下同様）。

40）原物を確認した。なお，国立中央図書館の資料検索で検索される2件のデジタル化資料の1件（UCI G701: B-00109937524）はこの釜山広域市立市民図書館蔵書を国立中央図書館が電子化したものである。また，もう1件（UCI G701: B-00048002999）は，「明治38［1905］」とされているものの，少なくともデジタル化資料では表紙・奥付等を欠いているため版次は確定できない。第3版以降では手書きの印刷から活字印刷に変わる能勢辰五郎の献辞が活字印刷であること，以下で述べる増補があること等から少なくとも第6版以降の版次のものであることがわかる。

41）訂正増補第8版奥付では15日とある。

42）表紙上部の記述。奥付では単に「第八版」とある。

43）註9で述べた通り，OPACの版次が原物と異なっている。成玧姸（2008: 39）では「筆者が直接確認できたもの」として「東大（7版明治39）」を挙げているが，管見の限りでは確認できなかった。

44）河東鎬（1985）では誠文堂書店と誤っており，金敏洙（1985; 2008[2]）も誤りを継承している。

45）国会図書館蔵訂正増補第7版D・早稲田大学蔵訂正増補第8版により確認した。

らかになる。なお，第6版を見出し得ておらず，「一閲ヲ加ヘ」たのが「第六版ヲ重ヌル」前とも後とも解せるため，訂正増補版が第6版からか第7版からか現段階では不明である。増補部分には，「貨幣度量衡ニ関スル称呼」のほか，発音・表記や文法の補足，会話が加えられた。

当時の学習書の編纂では，国内外で自著を含めて「使い回し」が行われていた[46]。『実用韓語学』にも『実地応用朝鮮語独学書』（弓場重栄）からの流用が見られる。このような「使い回し」は特に明示されないことが多いが，本書で島井は示した一部の例文について「此金海ノ問答ハ弓場氏ノ著書ヨリ引用セシモノナリ」（82頁）と明示している[47]。

(2)　『実用日韓会話独学 全』

兪兢鎮　校閲[48]。1905（明治38）年5月1日発行の初版が大阪府立中央（1511257147）[49]，台湾大学（2779024）に所蔵されている[50]。この他，同じく初版が国立国会（98-121）Dにも所蔵されているが発行日が同年の5月23日となっている。

発行所・印刷所・定価はすべて東京の誠之堂書店，東京の六合舎，定価は50銭である。

発行日の異なる2種の初版があるが，国立国会図書館蔵書の発行日「二十三」は象眼訂正もしくはゴム印等で「一」に「二丨三」を足して修正した形跡がある。また，いずれも奥付では著作者を鳥井浩と誤記している他，発行者の住所の番地も番地の地の誤植により「四番地」とあるべきものが「四番番」となっている。

(3)　『日韓韓日新会話』

孫斗植　訂正[51]。確認できた本書の異本の書誌は表2の通りである。

表2　『日韓韓日新会話』の書誌

発行日	版次	所蔵（資料番号等）
1906/M39年2月20日	初版	ハーバード大学（K5973.08/2253.2）D[52]，国立国会（特5-515）D
1908/M41年12月30日	4版（ママ）	東京経済大学［桜井文庫］（613）D
1910/M43年4月15日	3版（ママ）	秋田県立（112228465）

46）植田（2014, 2018）参照。

47）正確には弓場の文を基にして若干手を入れた文が収録されている。なお，齊藤（2015a: 46）では『実用韓語学』と『実地応用朝鮮語独学書』の単語の部門配列の共通性から，島井が後者を「目にすることができた可能性は高い。」と推測しているが，このように参照したことが明記されている。さらに，成玧姸（2008: 56）等も指摘しているが，後述するように，『日韓韓日新会話』でも恩師（国分哲）の教授内容に基づく部分を明示している。

48）台湾大学蔵書は表紙・標題紙を欠いているため，大阪府立中央図書館蔵書により確認した。

49）（　）内は表1と同じく資料番号等（以下同様）。

50）成玧姸（2008: 39）では「筆者が直接確認できたもの」の所蔵場所として「阪大」を挙げているが，管見の限りでは確認できなかった。

51）凡例にあたる「注意」に記載。

52）**中国哲学书电子化计划**　https://ctext.org/library.pl?if=gb&res=97934（2022年9月29日最終接続）。請求記号は標題紙裏に記入されたもの。

発行所・印刷所・定価はすべて東京・大阪の青木嵩山堂，大阪の嵩山堂印刷部，定価は80銭である。

表2のように3版と4版で発行日が逆転しており，4版が先に出版されたことになっている。3・4版とも奥付に初版の発行日はなく，当該版次の発行日のみが示されている。次章で述べるように，「4版」とあるものが「3版」ではないかと推測される。

凡例にあたる「注意」が日本語・朝鮮語で書かれているが，前者には「会話六七八ノ三章ハ編者ガ韓語ヲ学ブノ際恩師ノ教授ヲ筆記セシモノ日訳ヲ加ヘテ本書ニ掲ケタリ」とあり，当該個所は国分哲の講義を反映していると見られる。

(4) 『(独学) 日語会話』

確認できた本書は国立国会（特66-914）Dに所蔵されている1908（明治41）年6月1日発行の初版のみである。発行所は記載されておらず，印刷所は東京の株式会社東京築地活版製造所，定価は35銭である。書名は標題紙・本文の冒頭と末尾には「日語会話」とあるが，各頁欄外には「独学日語会話」とある。

(5) 『韓語五十日間独修』

白浚喆　閲。確認できた本書は1910（明治43）年6月15日発行の初版のみで，石川県立（000845958），秋田県立（112228457），大阪府立中央（1511256941），国立国会（29-331）Dに所蔵されている。発行所・印刷所・定価はすべて東京・大阪の青木嵩山堂，大阪の嵩山堂印刷部，定価は80銭である。

(6) 『朝鮮語五十日間独修』

白浚喆　閲。1918（大正7）年6月5日発行の再版が東京経済大学［桜井文庫］（629）Dに，1923（大正12）年8月10日発行の10版が大阪大学（16200370183）に所蔵されている。

発行所・印刷所・定価は大阪の田中宋栄堂，不明記（印刷者は大阪の吉田由治郎），定価は80銭である。いずれも奥付に初版の発行日は示されていない。

韓国併合に伴い，『韓語五十日間独修』での韓語を朝鮮語（鮮語），韓国を朝鮮，在韓を在鮮等と変えたものと見られる。次章で述べるように，基本的には『韓語五十日間独修』と同内容であり，次章で説明する「作り本」と見られる。

4．商業出版物・実用書としての島井の学習書

植田（2014）は近代日本の出版における朝鮮語学習書の商業出版物・実用書としての性格に

着目して金島苔水の学習書を分析し，それらが商業出版物・実用書であり，その多くが「作り本」[53]であったと述べた。そして，これらの学習書について，出版社にとっては「内容の充実度や正確さより売れ行きが重要であ」り，執筆者にとっては，「自己のより豊かな物質的生活の追求のために、生涯のある時期に身に付けた朝鮮語を使い、生涯のある時期に時流に乗った本を、時には原稿の使い回しもして書いたという側面も見いだせる」と結論付けた。このような視点から見れば，先行研究で島井とともに「明治後期における代表的な朝鮮語の普及者」[54]と評価された金島苔水には「些か胡散臭い催眠術家」という人物像すら立ち現われ，到底朝鮮語の普及者というような人物像は見えてこない[55]。また，ある人物が多くの朝鮮語学習書を著したからといって「韓国語専門家」である[56]と単純に評価することはできない。

本章では，それぞれの学習書について，著者の島井自身の出版意図，出版社の広告の文言[57]，また，序や紹介等に見られる第3者の評価等を見ることにより，これらの学習書の商業出版物・実用書としての性格を考察する。商業出版物としての学習書の特徴とは，学習者＝購入者のハードルを下げて購入を促す，出版社による販売拡大・促進という利潤追求のための種々の装置によって特徴づけられる[58]。

まず版元の特徴から，島井の学習書が作り本を含む商業出版物・実用書であることを確認した後，(1)権威者執筆イメージ化，(2)容易実践的イメージ化，(3)見かけ重視化，(4)売り上げ倍増化，(5)学習者の裾野照準化という5つの出版上の方略に着目して島井の朝鮮語／日本語学習書の性格をそれぞれ検討する。

これらの方略を以下のように定義する。

(1) 権威者執筆イメージ化：執筆者がその分野の権威者であるというイメージを醸し出す方略[59]

(2) 容易実践的イメージ化：実用的と銘打ち，いかにも朝鮮語がいともたやすく身につきやすそうであり，実践的で役立ちそうで有用だというイメージを与える方略

(3) 見かけ重視化：装丁や紙質を高級そうに見えるものにしたり，ハンディで携帯に便利な袖珍本サイズに小型化し使い勝手よさそうにする見かけ上の工夫によって購買意欲を高めようとする方略

(4) 売り上げ倍増化：日本語母語話者の朝鮮語学習のみならず，朝鮮語母語話者の日本語学

53)「出版社から紙型を買って，初めから定価以下で小売する予定で，用紙・印刷・製本・宣伝・人件費などをできるだけ安くして作られた本」を指す（出版事典編集委員会 編集 1971: 326）。

54) 成玧姸（2008: 39）。成玧姸（2014b: 67）では，さらに「朝鮮語と日本語の普及者」としている。

55) 植田（2014）。この胡散臭さについては，植田（2021: 18）参照。

56) 李康民（2015: 197）

57) 広告の特性を考慮すれば，その内容が必ずしも事実のみから成っているとは限らないが，少なくとも版元の当該書籍に対するスタンスの一端を知ることが可能である。

58) 植田（2014, 2017, 2018, 2019）等参照。

59) 校閲者，題字・題言等の揮毫者，序の執筆者等もこれに準ずる。

習への流用も念頭に置き，購入者を単純計算で2倍にしようと目論む方略[60]

(5) 学習者の裾野照準化：総花的な用途・対象を想定し，とりわけ初学者に照準化して学習者＝購入者の裾野拡大を目論む方略

主として，(1)から(3)は学習者の購入意欲に，(4)・(5)は出版社の販売拡大・促進に作用する方略である。

ここではまず，植田（2014）を参考に，島井の学習書が商業出版物・実用書であるということを版元の特徴から確認する。

『実用韓語学』・『実用日韓会話独学 全』の版元は東京の誠之堂書店である。詳細は不明であるが，『実用韓語学』（初版）巻末の16頁に及ぶ「出版目録」を見れば，主に教科書や実用書を出版している版元である。

『日韓韓日新会話』・『韓語五十日間独修』の版元は大阪・東京の青木嵩山堂である[61]。明治初年，青木恒三郎が創立した。書籍通信販売本部を設け，東京日本橋に東京書の仕入部を置き，東京・大阪の出版物と自店出版物の総目録を全国の購読者に配布した通信販売業の創祖であった。当時の代表的総合出版社となったが，1921（大正10）年頃，出版物の紙型・在庫品一切を市会開催して売払い閉店した。なお，同社は金島苔水の学習書も5冊出版している。

『朝鮮語五十日間独修』の版元は大阪の田中宋栄堂である[62]。1804（文化元）年，秋田屋から別家して創業された。5代目田中太右衛門が後継者となるも幼少のため姉婿大塚卯三郎を迎え，小学校用参考図書の刊行により，出版物に一新の機軸を画すなど出版物を改廃して時宜に適させた。大塚の死後，5代目は積極商策を樹立し，出版物を増版し販路を拡張し一大飛躍を試みた。なお，同社は『日韓会話』（秦兵逸，初版不詳，1906年3版）も出版している。

これらは主として大阪に本拠を置く書店であり，実用書を(も)扱う出版社である。これは，「大阪の出版物は、第一が学参物、第二が実用書、第三が娯楽物、第四が地図その他でした。」[63]という当時の出版状況とも合致する。

以上から，発行所が示されていない『日語会話』は措くとしても，5冊の朝鮮語学習書が商業出版物・実用書であったと見なして支障はないと思われる。とりわけ『朝鮮語五十日間独修』は，文言の修正やカットの差し替え等の他は組版も基本的には『韓語五十日間独修』と同内容である。ここからは，5冊のうち少なくとも同書は，新本でありながら諸事情による処分品として定価以下で安く，特別の価格で売られる「特価本」，あるいはその異称である「作り本」・

60）当時の言語状況から，朝鮮語学習書から日本語学習書にシフトしたとも考えられようが，両用とされた学習書が日本語学習にどれほど実効性を持ったのかという点からここではひとまず「売り上げ倍増化」としてとらえておく。他言語の両用学習書の例としては，『独学日露対話捷径』（伊藤伊吉，毎日新聞社，1892年），『国語対訳台語大成』（劉克明，新高堂書店，1916年）等がある。なお，既刊の朝鮮語学習書を利用して日本語学習書を著すこともこれに準ずる。

61）本段落の記述は湯川（1960序: 352–353），林（2010: 36），鈴木（1996: 32–33），青木（2010: 69–95），植田（2014: 65–67）による。

62）本段落の記述は出版タイムス社（1930: 128）による。

63）榎本（1981: 127）

「ぞっき本」・「見切本」・「数者」・「擦れ本」の類[64]，とくに作り本であった可能性が高いと言えよう。

次に，島井の学習書が作り本を含む商業出版物・実用書であるということを前提として，上述の5つの方略を念頭にそれぞれの学習書に見られる方略を検討する。

(1)　実用韓語学

まず，新聞広告での島井についての描写を見る。島井の最初の学習書である本書の広告では著者と校閲者について，「本書は多年韓国に在て実用韓語に最通暁せられし氏の著にして殊に韓国三家の厳密校正を経たるものなれば」[65]という宣伝文句で，島井が実用韓語にもっとも通暁していることや長い現地在住の経験が強調され，朝鮮語の権威者であるというイメージが前面に押し出されている。校閲者についての描写も同様の意図と解釈できよう。初版・再版に麗々しく掲げられた尾崎三良と徐学伊の題字・題言もまた本書の権威を高めるとともに，見かけ重視化の役割をも果たしていると言えよう。なお，2冊目の『実用日韓会話独学』の広告でもほぼ同じ文言で『実用韓語学』と合せて宣伝されている[66]。さらに3冊目の『日韓韓日新会話』の広告では，「斯書は著者多年在韓の経験により産み出されたるものにして」[67]と宣伝されている。このように，権威者執筆イメージ化が垣間見られる。

島井自身は巻頭の「注意」で「韓語ヲ学ブノ書乏シカラスト雖モ文典的ノ順序アルモノナク学習ノ際一一教師ノ説明ヲ待タサル可ラス初学者ノ尤モ苦ム所ナリ因テ実用会話ヲ十章ニ分チ一一説明ヲ加ヘタリ本書ハ成ルヘク系統的ニ実地的ニ組織スルコトヲ勉メタリト雖モ」，「発音ハ仮名ヲ附シテ初学者ノ独習ニ便スト雖モ」等と述べ，初学者を対象に系統的かつ「実地的」に編纂したと述べている。続けて，「終リニ普通ノ会話一篇ヲ附ス已ニ此篇ヲ了セラレナバ交隣須知ノ如キ隣語大方ノ如キ容易ニ困難ナク学習シ得ラルベシト信ス」とも述べ，交隣須知や隣語大方への橋渡し的な学習書と位置付けている。

島井と同時代を生きた第3者である大曲美太郎は，『日韓通話』・『実地応用朝鮮語独学書』・『実用韓語学』が「其の当時朝鮮語の学習者に洵に重宝がられたものである。」と指摘している[68]。また大曲は，谷垣嘉市の「此書の編纂が成るべく注入的を避けて成るべく開発的に，平易

64）出版事典編集委員会 編集（1971: 326）

65）『東京朝日新聞』（朝刊）1904年6月9日付(8)・1906年1月17日付(5)D。後者は『実用韓語学』と『実用日韓会話独学』とを合わせた広告であり，前者の「氏の」が「島井浩氏の」，「韓国三家」が「韓国大家」と変更されている。広告等から見る限り，経歴などの強調は見られるものの，他の学習書との差別化を図るいわば「島井ブランド」のような宣伝のスタイルは見られないようである。なお，朝鮮語学習書としては4冊目になる『韓語五十日間独習』の広告では，韓語独修書は多いが語法について尽くしたものはないと述べ，「著者此処に意を致し初学者の修学上最も至難とせる語法を研究的に編纂せられたり」と宣伝されているのみであることは，島井の権威者イメージがある程度定着したことを示唆している可能性もあるかもしれない（『東京朝日新聞』（朝刊）1910年9月8日(1)D）。

66）『東京朝日新聞』（朝刊）1906年1月17日付(5)D

67）『東京朝日新聞』（朝刊）1906年3月16日付(5)D

68）大曲（1936: 161）

を主として而も其活用法を親切に説述し，独学書たると同時に教科書体に適せしめたるは，在来の韓語書に於て見さりし所以なり。」とする書評を引用している[69]。

実地での朝鮮語運用能力の習得を目的とする旧朝鮮語学は実用を前提とする。「実用会話」・「実地的ニ組織」・「困難ナク学習」といったことばは，いかにも朝鮮語がいともたやすく身につきやすそうであり，実践的で役立ちそうで有用だという，現代でいうなら「生きたことば」が身につきそうなイメージを与えるものであって，この前提を明確に表している。また，重宝で独学書としても教科書としても使えるというコンセプトは商業出版物としても優れているということを物語っている。ここには容易実践的イメージ化が垣間見える。さらに，初学者を対象とするという点も購入者が多く見込めるという点で学習者の裾野照準化が感じられる。実際，1905・1906（明治38・39）年に「釜山港日本居留地釜山公立小（ママ）学校の補習科朝鮮語の教科書として採用せられた」[70]というのも，内容に加え，このような本書の性格によるところがあろう。

広告に見る想定された用途は，「出征の士軍属事業渡韓者は固より時局に鑑み韓語を解せんと欲する士は要須欠可からざる良書」，「商工起業渡韓者は固より時局に鑑み韓語を解せんと欲する士は要須欠可からざる良書」[71]というように，総花的なものである。ここにもまた，学習者の裾野照準化という方略が見える。

(2) 実用日韓会話独学

島井自身の序の類は付されていないが，冒頭に日本仮名と韓国諺文の説明が併置され，日本語には振り仮名が，朝鮮語にもカナで発音が付記されており，日本語母語話者の朝鮮語学習のみならず，朝鮮語母語話者の日本語学習への流用も念頭に置いている。このような形態は，商業出版物という観点から見れば，購入者を単純計算で2倍にすることを目論む売り上げ倍増化の方略が垣間見える。

『実用韓語学』と合せて宣伝する上掲の広告に見る想定された対象は，「商工起業渡韓者は固より時局に鑑み韓語を解せんと欲する士」[72]とやはり総花的なものである。ここにも学習者の裾野照準化という方略が感じられる。なお，3章で見た奥付での著者名や住所の誤植には，商業出版物の杜撰な特徴が見える。

(3) 日韓韓日新会話

奥付の検印を押す正方形内に縦書3行で「著作／権／所有」と表示された右横の書名は初版

69）大曲（1936: 162）

70）大曲（1936: 162）。教科書としての採用は，学習者の裾野照準化にもつながるとともに，コンスタントな販売が見込まれる。なお，同校は1906（明治39）年4月に釜山公立尋常小学校となり，その際に補習科は釜山商業学校と釜山高等女学校となっている（稲葉2005: 98–100）。

71）『東京朝日新聞』（朝刊）1904年6月9日付(8)・1906年1月17日付(5)D。『実用日韓会話独学 全』（初版)Dにもほぼ同じ文言の広告が載っている

72）『東京朝日新聞』（朝刊）1906年1月17日付(5)D

では「日韓新会話」，3 版・4 版では「日韓韓日会話」となっている。また，3 版では「著作／権／所有」が「著有／権／所作」となっている。ここにもあたかも作り本のような杜撰な作りが垣間見える。この「著作権所有」の異同からは，初版と「4 版」に連続性が見られ，「4 版」とあるものが「3 版」ではないかと推測される。

島井自身は巻頭の「注意」で，「文法ヲ初学者ニ説クハ殆ド無用ノ労タルベキヲ信ジ之ヲ省ケリ故ニ韓語ノ文法ヲ味ハントナラハ実用韓語学ヲ閲セラレンヿヲ希望ス」と述べ，『実用韓語学』より実用書的側面を強調している。また，併置された日本語学習者に向けた朝鮮語による巻頭のことばでも同様に「文法を初学者にいうことは，ただ辛く苦しい思いをさせるのみであると考え削除したので，文法を学習しようとする者は日本俗語文典を熟読することを望む」[73]と述べている。続けて仮名遣いについては「実際ノ言語ニ近キモノヲ取レリ」，朝鮮文字の綴字については「日常の言語に近いものを記録したので」[74]と述べ，ここでも実用性を重ねて強調している。このように，容易実践的イメージ化が見られる。また，『実用韓語学』との違いを強調し，補い合うセットものであるかのように提示することは，売り上げ倍増化をも示唆する。

島井自身も「注意」で「本書は日人ノ韓語ヲ学ヒ韓人ノ日語ヲ学ブノ階梯トスル目的ヲ以テ編纂シ」たと述べており，日朝両言語での「注意」の併置，冒頭の日本仮名と韓国諺文の説明の併置，日本語には振り仮名が，朝鮮語にはカナで発音が付記されている。また，広告に見る想定された用途にも，「日語を知らざる韓人と韓語を知らざる日人とが直に対話し得る可く（得可く）如何なる用件も処理（所理）し得らるべき良書」[75]とある。このように，日本語母語話者の朝鮮語学習と朝鮮語母語話者の日本語学習への利用を一層強く押し出している。ここには売り上げ倍増化の方略がより濃く垣間見える。さらに広告の文言から考えれば，現代の『旅の指さし会話帳』シリーズ（情報センター出版局）のように，「指さし」で「直に対話」したり，「用件も処理」するといった用いられ方すらしていた可能性もある。

ここで，島井の朝鮮語学習書の版型の変化を示す[76]。

『実用韓語学』	184 × 127 ㎜（縦 × 横）	釜山広域市立市民蔵（初版）
『実用日韓会話独学 全』	187 × 122 ㎜	大阪府立中央蔵（初版）
『日韓韓日新会話』	152 × 106 ㎜	秋田県立蔵（3版）（ママ）
『韓語五十日間独修』	150 × 106 ㎜	石川県立蔵（初版）
『朝鮮語五十日間独修』	151 × 107 ㎜	大阪大学蔵（10 版）

73）拙訳。原文は「文法을初學者에게、말슴ᄒᆞ는거슨、다만辛苦만식힘뿐인줄알고刪除ᄒᆞ니、文法을學習ᄒᆞ려ᄂᆞ者ᄂᆞ日本俗語文典을熟讀ᄒᆞ기를望홈」。

74）拙訳。原文は「恒常言語에각가운거슬、記錄ᄒᆡᆺ스니」。

75）『東京朝日新聞』（朝刊）1906 年 3 月 16 日付（5)D，『韓語五十日間独修』初版巻末広告。後者では 2 箇所が（　）内のように表記されている。

76）計測した資料はすべて原物。同版の場合を含め，同一書でも大きさに若干の誤差がある場合があるため，計測に使用した資料の所蔵機関を示す。

『実用韓語学』と『実用日韓会話独学 全』が教科書サイズ的であるのに比して，『日韓韓日新会話』以降の学習書は携帯に便利な袖珍本サイズに小型化している。同書の広告でも「ポケット入洋装」と袖珍本サイズであることが宣伝されている。また，この「洋装」や『韓語五十日間独修』の広告での「クロス綴」という宣伝文句は，高級そうで立派に見えさせる装置となっている。このように使い勝手の良さを強調したり，高級感を醸し出す装置によって実用書としての性格である見かけ重視化の方略が用いられていると言えよう。

本書では容易実践的イメージ化・学習者の裾野照準化・売り上げ倍増化のほか，見かけ重視化という方略が加わり商業出版物としての性格がさらに明確に現れている。

(4) （独学）日語会話

島井自身は巻頭のことばで，「近来朝鮮人で日本語を学ぶ人が次第によく見られるようになり，適切な本はないので，あるいは日本人に口語を書いて学び，さもなくば本来日本人が韓語の勉強のために編纂した本によって逆に日本語を学んでいるので，私が何年か朝鮮におり，朝鮮の友人も多いために，そのような友人子弟らが日本語の勉強をしようとして，異口同音に日本語の本を編纂することを催促するので，浅学を顧みずこの小さな本を編むのである。」[77]と述べている。このように，朝鮮語母語話者の日本語学習用に編纂したとされている。しかし，日本語には振り仮名が，朝鮮語にはカナで発音が付記されており，日本語母語話者の朝鮮語学習にも流用が可能そうに見える形式になっている。

ここでも容易実践的イメージ化・売り上げ倍増化という方略に商業出版物としての性格が明確に現れている。日本語学習書を編纂したことを以って，日本語普及にも関心を持っていた等とのみ短絡的に評価されることがあり得るが，商業出版物・実用書という性格も看過できない。

(5) 韓語五十日間独修

書名は，表紙，標題紙，本文の冒頭・末尾・上部欄外には「韓語五十日間独修」とあるが，目次冒頭では「修」が「習」になっている。また，奥付の検印を押す正方形内に縦書3行で「著作／権／所有」と表示された右横の書名は「日韓会話五十日間速成」となっている。これをよく観察すれば，「五十」はやや左に，「日」はやや右に傾いている。このような1冊の本の中での書名の誤り・不統一や組版の杜撰さは同じ出版社から出版された『日韓会話三十日速成』（金島苔水・李鎮豊，1904年）でも見られ[78]，あたかも作り本のような杜撰さを示している。

島井自身の序の類は付されていないが，やはり日本語には振り仮名が，朝鮮語にもカナで発

77）拙訳。原文は「近來朝鮮사ᄅᆞᆷ이、日語ᄇᆡ우느니가、次々흔하고、的當ᄒᆞᆫ冊은、업스니、或日人에 口語를、써서ᄇᆡ우고、그러치아니면、本是日人이、韓語工夫를爲ᄒᆞ여編纂ᄒᆞᆫ冊을、가지고、걱구로、日語를、ᄇᆡ우는지라、내가、여러히、朝鮮에잇고、朝鮮親舊도만키로、그런親舊子弟들이、日語工夫를、ᄒᆞ고져、하여異口同聲으로、日語冊編纂ᄒᆞ기를、催促ᄒᆞ니、不顧淺學ᄒᆞ여、此小冊을編홈」。

78）植田（2014: 65・71）。なお，同書の奥付ではさらに「日韓会話速成」となっている。東京大学東洋文化研究所蔵書（1905年再版）により確認。

音が付記されており，日本語母語話者の朝鮮語学習のみならず，朝鮮語母語話者の日本語学習への流用も念頭に置いている。

広告には，「世に韓語独習の書多しと雖も未だ語法に就てこれを尽せるものなし、著者此処に意を致し初学者の修学上最も至難とせる語法を研究的に編纂せられたり、これ本書の特色とする処、さればとて諺文に□ならず、単語あり会話あり、以て五十日の後に至れば能く会話の大要に通暁し、反覆練習せば其蘊奥を窺ふに足らんか。」[79]と初学者を対象とし，いかにもたやすく50日で朝鮮語に「通暁」できるかのように到達目標を明示した，魅力的な文言が並んでいる。

また，「日韓合併記念発行の朝鮮語独修書」というタイトルの下，『韓語五十日間独修』他8冊の青木嵩山堂出版の朝鮮語学習書の広告が出ているのも何らかの出来事を販売促進と結び付けようとする学習者の裾野照準化と言えよう[80]。

ここでも容易実践的イメージ化・売り上げ倍増化・学習者の裾野照準化の他，前述の見かけ重視化という方略に商業出版物としての性格が明確に現れている。本書に至って，さらに具体的な到達目標を掲げることにより，いっそう商業出版物・実用書という性格が浮かび上がっている。

(6) 朝鮮語五十日間独修

書名は，表紙・標題紙・奥付には「朝鮮語五十日間独修」とあるが，目次冒頭，本文の冒頭・末尾では「修」が「習」になっている。ここにもまさに作り本の杜撰な作りが見える。

齊藤（2015b: 35）では「p. 25の最後の行の一部が見えない」と述べているが，版次の異なる大阪大学蔵書[81]では見えている。これもまた，作り本の杜撰な作りと見ることもできよう。

以上を総合して，近代日本の出版という文脈の中で再解釈すれば，植田（2014）で指摘したほかにも，権威者執筆イメージ化・容易実践的イメージ化・見かけ重視化・学習者の裾野照準化・売り上げ倍増化という方略に見られるように，作り本を含む，時勢に応じた商業出版物・実用書であったという島井の学習書の性格が如実に表れている。

5．在釜山日本人の朝鮮語観

島井と朝鮮語との関わりを考える前提として，本章では1895（明治28）年に出された公立夜学校の紹介記事「釜山の状況」[82]を基に在釜山日本人の朝鮮語観を見る。同校は島井が朝鮮語を

79）『東京朝日新聞』（朝刊）1910年9月8日付(1)D。判読不能の文字を□で示す。

80）『東京朝日新聞』（朝刊）1910年9月8日付(1)D

81）大阪大学蔵書と同版次の個人蔵書でも同様であった。

82）『教育報知』498D，1895年，26頁。本章でこれに基づく部分は特に注記せず，その他の資料に依った箇所は明記する。稲葉（2005: 37–38, 44）にこの記事への言及がある。

学んだ釜山共立学校（1888–1895）[83]の夜学の後身と見られる。前述のように，島井は1893（明治26）年2月から1900（明治33）年9月まで同校で英語科と朝鮮語科の嘱托（ママ）教員として勤めていた。

公立夜学校は公立小学校（1895–1906）[84]と同所に設置され，商業夜学校の名で「当港各店の雇人にして、昼間余暇なきものに、実業上の智識活用を授くる」目的で，英語・韓語・商業の3科を開設，全科または1・2科を「撰修」し，各学科3年6学期制をとり，毎日日没より3時間授業を行っていた。その後，商業科を廃止して共立夜学校と改称，1894（明治27）年には英語科を廃し，韓語科のみの公立夜学校となった。1895（明治28）年3月の新学期初めには，入学32，退学2，在籍生58，出席生55名という規模のものであった。入学には，釜山港の地所拝借人を保証人とする必要があったが，生徒の入退学は「割合に繁多」であったという。校長は小学校長が兼ね，教師は，日本人・韓人各2名であった。教育された朝鮮語は同地の方言ではなく，「主として是等野卑なる語を避け、紳士間に用ゐて恥ちず、全国に通じて用ふ可きを旨とし」たという。そのため，韓人教師のうち1人は必ず京城より招聘しており，当時の教師のうち1人は京城人，もう1人は釜山の監理署の訳官が務めていた。

記事はまた，在釜山日本人の朝鮮語観について以下のように述べている[85]。

「抑も当港に於て、韓語の必用なる［こと］[86]は勿論にして、三尺の児童と雖も、亦日々の売買に用ふべき韓語を知らずんば、非常の不便を感すべく、殊に貿易に従事する商人の如き、巧に韓語を使用すると否とは、乃ち利と損との在る所にして韓語に通するものは、亦此国の人情風俗に通するは自然の理なれば、是等の人は、仮令雇人となるも高給を得べく、進むては其店を料理するの番頭ともなり得べければ、当港の如き貿易地に在りては、立身の基は韓語に通するにありと云うも虚言ならず、従ひて青年者の入学研究するもの最も多し。」[87]

ここからは，朝鮮語に通ずることが，釜山の日本人，とりわけ商人にとって利益や高給に直結する「立身の基」であるため，「青年者」が多く入学していることがわかる。

さらに，日清戦争によって，「通弁者を要する［こと］無数なるより、当地に在るの人にして、苟も少しく韓語に通するものは、大概募集に応し、或は招聘せられ、或は徴発せられ、是等多くは財産を作り得たるを見、俄然として韓語熱を沸騰せしめ、入学企（ママ）望者も続々踵を接するに至れり。」と述べ，「少しく韓語に通するもの」の多くがそれによって「財産を作り得た」のを見て朝鮮語ブームが起こったことを述べている。

一方で，朝鮮語学習に挫折するものが多い理由を以下のように分析している。

「最初は必用に迫られ、或は目的を立て入学するも、困難に堪へずして退学すると、又韓語の研究は、必ずしも本校に依らさるも可なるとの二件ならんか、生徒は大概商人多く、彼等は終

83）公立小学校とも学校の存在期間は稲葉（2005: 98）による。

84）ここでは記事執筆当時の校名になっているが，内容から見て，前身の釜山共立学校時代から記述されていると思われる。

85）以下，いささか長い部分もあるが，生々しさを伝えるためなるべくそのまま引用する。

86）［　］内は合字で表記（以下同様）。

87）この後，朝鮮語に次いで英語・支那語の順に流行していると述べている。

日店頭に於て、奔走孜孜として務め、僅かに晡に及ひて少閑を得、休憩の自由を与へらるゝや、他人は遊嬉するの時に於て、己れは倉皇夕飯を喫し登校せさる可からず、又店に帰りても、積荷の傍等に在りて、其受けたる所を暗誦記憶せさる可からず、是実に非常の忍耐力ある者に非ざれば、永く就学する［こと］を得さらしむるの源因ならん」

このような昼間の仕事と夜学校での勉強の両立の難しさの他，現地在住ゆえに店頭で同僚や顧客の韓人との日常生活の中で朝鮮語に「不知不識習熟」できることを学生が定着しない理由として指摘している。ただし，そのような朝鮮語に対しては，「猶我邦未就学児童が談話する言語と一般にして、意味も訓義も知らず、真字諺文も解せざるより、筆にせしものは読む可からす、且つ当港附近の方言を空に暗記する耳、完全と云ふを得」ないと評し，「真正に習熟せんと欲せば、必ず本校に入らざるべからず」と勧めている。

この記事は島井が朝鮮語を学んだ頃からは数年後のものではあるが，島井もおよそ朝鮮語の習得は「利」があり，「高給」に直結する「立身の基」，「財産を作り得」る元手とみる社会的雰囲気の中で朝鮮語を学び，さらには当時教えていた人物と見ることができよう。

6．島井浩と朝鮮語

既に見たように，対馬に生れた島井浩は，10代半ばに釜山に渡り，16年余を初等教育機関等で朝鮮語や英語を教える教員[88]として生きる。朝鮮語は，教員になるのと前後して夜学の韓語速成科で学んだ。夜学で学んでいたということは，教員を含め昼間には何らかの職に就いていたとみて支障はないであろう。いずれにせよ，学習書を見る限り，高い運用能力を有していたことは確かであろう。

島井は教員生活を終えた後，書記兼通訳として志岐組に入社する。このような教員から土木会社への転職は，同時代に刊行された『実地応用朝鮮語独学書』（哲学書院，1896年）の著者・弓場重栄が第一銀行・朝鮮銀行・京城銀行の銀行員，『韓語会話』（大日本図書株式会社，1904年）の著者・村上三男が「多年韓地に在り韓語に熟す」「京釜鉄道社員」であったように[89]，日本企業の多方面での韓国進出に伴う，朝鮮語に通じた要員の需要という時代的背景があると見られる。

しかし，島井の志岐組での勤めは長く続かず，程無く辞職する。島井自身がこれ以降「種々の仕事」に携ったと述べているが，貸金業・貸家業の痕跡はあるものの詳細は不明である。この後，『実用韓語学』を嚆矢に次々と朝鮮語（と日本語）の学習書を執筆・刊行する。確認できた限りで『実用韓語学』は6年間に8版，『日韓韓日新会話』が2年間に4版，『朝鮮語五十日

88）島井（1935: 86）の略歴に「夜学校英語科教員嘱托となる」とある他，前掲「釜山の今昔」でアンダーウッドの『韓英文法』（1890年）の内容に触れつつ「文法の説明方法」を高く評価していることから英語の能力もあることがうかがえ，英語も教えていたと判断した。

89）植田（2021），『東京朝日新聞』（朝刊）1904年1月26日付(8)D。なお，この広告では三男が三勇と誤記されている。

間独修』が期間は不明だが10版を重ねている。

島井の学習書は，金島苔水による朝鮮語学習書と同様に商業出版物・実用書という観点から見れば，当時の社会的状況の中で，はやりの売れ筋商品という側面をもっていたといえよう。出版社にとって利潤追求を目的とする出版という営為で実用書に求められものは，極言すれば売れ行きなのである。他方，執筆者にとっても同様のことが言える。志岐組辞職の後，朝鮮語ブームという時勢に応じて，「種々の仕事」のひとつとして朝鮮語を元手に商業出版物・実用書を執筆したのではないかと推測される。そして，金融業等を営んだことはすでに見た通りである。

さらに考えれば，通訳として雇用された志岐組以外での「種々の仕事」でも通訳として働いた可能性がある。通訳という職業は，単にある言語を他の言語で伝達するという訳ではなく，外交，行政，通商・貿易，商業，宗教，教育といった様々な営為に関わるものである。そういった複数の顔を持つ通訳という職の性格から見れば，「種々の仕事」という表現は仕事の内容の特定を避けるためにあえて明言しなかったということも考えられよう[90]。

人物史主義では，人物の生涯を通して，時代の中にその人物や著作を位置づける。ある人物の生は，現代の視点を以って短絡的に評価するのではなく，当時の社会的・文化的背景のなかで総合的に捉えて初めて，その様相が見えてくるのである。例えば，朝鮮語学習書を執筆したからといって，その人物の生が朝鮮や朝鮮語にのみ結びついているとは限らない。ひとりの人物の一生の中で，その一部において朝鮮・朝鮮語と関わったという視点が必要であろう。言い換えれば，島井にとって10代半ばに身につけた朝鮮語は，当時の在釜山日本人の朝鮮語観と合わせ見れば，教員，学習書の著者，さらには土木会社員・金融業・貸家業といった「種々の仕事」という職業の変遷の中で，生業の元手となったということもできるであろう[91]。時勢に応じた朝鮮語や日本語学習書の編纂もこのような複数の顔のひとつであったともいうことができよう。

したがって，「金水（ママ）苔水とともに，明治後期における代表的な朝鮮語の普及者といえよう。」，「1902年から1918年の16年間にかけて6冊も朝鮮語会話書や日本語会話書の編纂に携わる等、両国の架け橋の役割を果たした。」，「『実用韓語学』（1902年）をはじめとして『実用日韓会話独学』（1905年）、『日韓・韓（ママ）日新会話』（1906年）等を著述した韓国語専門家である。」[92]というような評価は当たらないのである。

90）『朝鮮語通訳と時勢』で，島井が主として明治以降，朝鮮語通訳が時勢の中で翻弄される姿を遺著として描き残していることからも，島井自身が自らをそのような通訳と重ね合わせて位置付けていたと見ることもできよう。また，同書が朝鮮総督府警務局からの寄贈書であること（「序に代えて」の頁の寄贈印）も指摘しておく。

91）このような点を念頭に置くなら，学習書の校閲者のみを見て，「島井が接した人々が教養ある階層で」（成玧姸2008: 50）あったと断ずるのは一面的といえるであろう。

92）成玧姸（2008: 39），李康民（2015: 197）

7．おわりに

ここで出身地・対馬を中心とした視点で島井の生涯を考える。対馬と釜山は明治維新以前も歴史的に深い関係があった。釜山の日本人人口を見れば[93]，開港の1876（明治9）年には82人であったものが，すでにその2年後には「此の居留地ハ対馬厳原の支町と言ふて可なり」[94]という状況だったという。1879（明治12）年には700人と急増するが，その後も日本人は基本的に増加の途をたどり，島井が渡航した1883（明治16）年には1,780人，日清戦争開戦の1894（明治27）年には4,028人となり，「日清戦争以後には釜山に移住する日本人の数が急激に増加しており、釜山は名実ともに「日本人の町」としての姿を整えていく」という状況になる。さらに，日露戦争開戦の1904（明治37）年には，11,996人，韓国併合の1910（明治43）年には21,928人に達し，日本人専管居留地の日本人と朝鮮人の人口はほぼ同数となり，社会・経済活動が行われる日本人社会が形成される[95]。

稲葉（2005: 39–40）は，併合以前の居留民について，「多くは，半島の地に永住することを大前提としてはいなかった。換言すれば，出稼ぎ的な色彩が濃かったのである。」と指摘している。島井の渡韓当初の意図はわからないが，「転住」[96]という表現からも，この渡航が「出稼ぎ」のような一時的なものではなく，対馬から釜山の日本人社会に生活の舞台を移したということが感じられる。対馬を中心に円を描けばわかるように，対馬から釜山までは約50㎞，福岡までは約130㎞，大阪や東京はそれよりはるかに遠い地である。これを考えれば，対馬に生まれた島井が，日本人社会のある最も近い町として，歴史的にも密接な関係にある釜山に「転住」して新天地で人生を切り拓き，67年の人生のほとんどを同地の日本人社会で送ることになったことも容易に理解しうる。

本論文ではまず，島井の経歴を現存する諸資料によって人物史主義に基づき明らかにした。次に島井の学習書の書誌を原物主義に基づき実証的に明らかにした。さらに，日本近代の出版という文脈の中で，島井の学習書を再解釈し，それらが商業出版物・実用書であり，様々な方略が用いられていたことを指摘した。最後に日本近代朝鮮語教育史の中で島井の位置づけを再検討し，これまでとは異なる「対馬から釜山の日本人社会に渡り一生を送った人」という人物像を提示した。

朝鮮語のみならず，ある人物が多くの学習書を執筆したり，それが版を重ねたからといって，その人物がその言語の普及者や専門家であるとは単純に言えないことは，現代の日本における

93）本段落の以下の記述は，注記したもの以外，朴晋雨（2007: 214–215, 217, 220），森田（1912: 9–10），川島（1934: 19）に基づく。

94）『朝野新聞』1878年12月10日(2)（『朝野新聞　縮刷版』8，ぺりかん社，1981年の影印本に依った）

95）木村（1996: 396–397）は，朝鮮居留地の日本人について，必ずしも「定住化が順調に進んだわけではなかった」が「日露戦争後に［中略］定住化が進んだとみてよい」と指摘している。

96）前掲「釜山の今昔」

外国語を巡る状況を見ても容易に理解できるであろう。

引用文献[97)]

青木育志（2010）「青木嵩山堂の出版活動」吉川登 編『近代大阪の出版』創元社

稲葉継雄（2005）『旧韓国～朝鮮の「内地人」教育』九州大学出版会

尹栄珉（2015）「開化期韓日両国語学習書の特徴研究」『日本研究』23，高麗大学校日本研究センター＊

植田晃次（2007）『日本近現代朝鮮語教育史』（2005～2006年度科学研究費補助金基盤研究（B）「日本における朝鮮語教育史の総合的・実証的研究」（課題番号：20320081）研究成果報告書）

植田晃次（2010）「朝鮮語研究会（李完応会長・伊藤韓堂主幹）の活動と民間団体としての性格」『言語文化研究』36，大阪大学大学院言語文化研究科

植田晃次（2012）「明治期朝鮮語学習書・伊藤伊吉『独学韓語大成 全』の書誌学的研究」**李东哲・权宇『日本语言文化研究』第二辑（上），延边大学出版社**

植田晃次（2013）「島井浩の経歴と著書―日本近代朝鮮語教育史の視点から―」第64回朝鮮学会大会（2013年10月6日）研究発表配布資料

植田晃次（2014）「金島苔水とその著書」**李东哲・安勇花『日本语言文化研究』第三辑（上），延边大学出版社**

植田晃次（2017）「日本近代朝鮮語教育史の視点から見た山本正誠と朝鮮語」『言語文化研究』43，大阪大学大学院言語文化研究科

植田晃次（2018）「日本近代朝鮮語教育史の視点から見た笹山章と朝鮮語」**李东哲・安勇花『日本语言文化研究』第五辑（下），延边大学出版社**

植田晃次（2019）「日本近代朝鮮語教育史の視点から見た伊藤韓堂（卯三郎）と朝鮮語」『言語文化研究』45，大阪大学大学院言語文化研究科

植田晃次（2021）「銀行員・弓場重栄と朝鮮語」『言語文化研究』47，大阪大学大学院言語文化研究科

植田晃次（2022）「旧朝鮮語学の国外への影響」『言語文化研究』48，大阪大学大学院言語文化研究科

榎本進一郎（1981）「昭和初期までの大阪赤本業界」八木敏夫 編集『全国出版物卸商業協同組合 三十年の歩み』全国出版物卸商業協同組合

大曲美太郎（1935）「釜山に於ける日本の朝鮮語学所と『交隣須知』の刊行」『月刊ドルメン』三月号，岡書院

97）朝鮮語の日本語表記の原則が存在しない現状に鑑み，朝鮮名は日本語読みにより配列した。

大曲美太郎（1936）「釜山港日本居留地に於ける朝鮮語教育」『青丘学叢』24，大阪屋号書店
小倉進平（1936）「「交隣須知」に就いて」『国語と国文学』13(6)，至文堂
河東鎬（1985）‘2 30 島井浩「実用韓語学」解説’金敏洙・河東鎬・高永根 編“歴代韓国文法大系 第2部第11冊”塔出版社＊
川島喜彙（1934）『新釜山大観』釜山出版協会 D
木村健二（1996）「朝鮮居留地における日本人の生活様態」『一橋論叢』115(2)，日本評論社
金敏洙（1985; 2008[2]）‘2 30島井浩「実用韓語学」解説’金敏洙・高永根 編“第2版 歴代韓国文法大系 第2部第11冊”博而精＊
黄雲（2021）「韓国開化期民間人発行の日本語学習書に関する研究」『日本語文学』89，韓国日本語文学会＊
齊藤明美（2015a）「明治35年刊『実用韓語学』の研究」『日本語文学』65，韓国日本語文学会［齊藤明美（2015）「明治35年刊『実用韓語学』の構成について」『韓国日本語文学会学術発表大会論文集』韓国日本研究総聯合会第4回国際学術大会 Symposium］
齊藤明美（2015b）「大正七年刊『朝鮮語五十日間独修』の研究」『日本語文学』67，韓国日本語文学会
齊藤明美（2015c）「島井浩が作成した日本語の教科書について」『韓国日本語学会第32回国際学術発表大会　学術シンポジウム』韓国日本語学会（学術大会資料）
齊藤明美（2017）「明治41年（1908）刊『日語会話』の研究」『人文社会科学研究』3(1)，中源大学校人文社会科学研究所
桜井義之（1974a）「日本人の朝鮮語学研究（一）」『韓』3(8)，図書文献センター
桜井義之（1974b）「日本人の朝鮮語学研究（三）」『韓』3(12)，図書文献センター
桜井義之（1979）『朝鮮研究文献誌―明治・大正編』龍溪書舎
島井浩（1935）『朝鮮語通訳と時勢』島井俊雄 D
出版事典編集委員会 編集（1971）『出版事典』株式会社出版ニュース社
出版タイムス社（1930）『日本出版大観』出版タイムス社 D
鈴木徹造（1996）『出版人物辞典　明治～平成　物故出版人』出版ニュース社
成玧姸（2008）「近代日本語資料としての『日韓韓日新会話』」『日本語学論集』4，東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室
SUN YUNA(成玧姸)（2009）「近代日本語資料としての朝鮮語会話書」東京大学博士学位取得論文
成玧姸（2014a）『近代朝鮮語会話書に関する研究』J & C
成玧姸（2014b）「開化期の日本語学習書『独学日語会話』に関する考察」『日本語教育研究』28，韓国日語教育学会
成玧姸（2015）「近代日本人の朝鮮語会話学習書『実用日韓会話独学』についての考察」『日本

語文学』65，韓国日本語文学会＊
田阪正則（2010）「公文書による韓語学所出身者たちのその後」『日語日本文学研究』73（2），韓国日語日本文学会
中田孝之介（1905）『在韓人士名鑑』木浦新報社（芳賀登 他 編集『日本人物情報大系　第71巻』皓星社，2001年の影印本に依った）
林哲夫（2010）『書影でたどる関西の出版100　明治・大正・昭和の珍本稀書』創元社
釜山商業会議所（1926）『大正十五年四月　会員名簿』釜山商業会議所（芳賀登 他 編集『日本人物情報大系　第80巻』皓星社，2001年の影印本に依った）
釜山商業会議所（1928）『昭和三年　会員名簿』釜山商業会議所（芳賀登 他 編集『日本人物情報大系　第80巻』皓星社，2001年の影印本に依った）
釜山府・釜山教育会（1927）『釜山教育五十年史』釜山府・釜山教育会（『朝鮮教育要覧　釜山教育五十年史（旧植民地教育資料集 2）』青史社，1982年の影印本に依った）
朴晋雨（2007）「開港期の釜山からみた日本の朝鮮認識」『「対話と深化」の次世代女性リーダーの育成：「魅力ある大学院教育」イニシアティブ（平成18年度活動報告書：シンポジウム編）』お茶の水女子大学「魅力ある大学院教育」イニシアティブ人社系事務局
森田福太郎（1912）『釜山要覧』釜山商工会議所 D
矢野謙一（2012）「日本における旧朝鮮語学」**李东哲 主编『日本语言文化研究』第二辑（下），延边大学出版社**
湯川松次郎（1960序）『上方の出版と文化』［上方出版文化会］　奥付なし
李吉鎔（2020）「『実用日韓会話独学』解題」李康民 編『近世および近代日本の韓国語学習資料叢書28』亦楽＊
李康民（2007）「島井浩と『実用韓語学』」『日本学報』71＊
李康民（2015）『近代日本の韓国語学習書』亦楽＊
李康民（2019）「『実用韓語学』解題」李康民 編『近世および近代日本の韓国語学習資料叢書15』亦楽＊
李康民（2020）「『日韓（ママ）・韓日 新会話』解題」李康民 編『同上31』亦楽＊
李康民（2021a）「『韓語五十日間独修』解題」李康民 編『同上41』亦楽＊
李康民（2021b）「『朝鮮語五十日間独修』解題」李康民 編『同上54』亦楽＊

付記：本論文は第64回朝鮮学会大会（2013年10月 6 日）での研究発表「島井浩の経歴と著書―日本近代朝鮮語教育史の視点から―」の内容（植田2013）に加筆・修正したものであり，JSPS 科研費 18K00782による成果の一部である。また，それ以前の科研費（17320085・20320081・23520671・26370726）で得た知見も含んでいる。

現在では不適切とされる語句も歴史的経緯から当時の表現を用いた場合がある。

資料閲覧にあたり，関係諸機関からご配慮をいただいた。また，一連の科研費による研究の共同研究者・矢野謙一教授（熊本学園大学）から多くの助言を，査読者お二方から有益なコメントを賜り，それを反映させた部分がある。あわせて感謝申し上げます。